

雑詠日記

徐山猿声

卷の九

一九九六年

市井一人

ある詩人が「詩とはなにか」という答えとして、「言葉の感覚にすぐれている人ではなく、自分でそう思っている人が書くものである。言葉がどういうものか、ほんとうのところは見えない（あるいははっきりさせたくない）人がつくっていくのが詩の歴史」と語っている。状況にたいしてある意図を持った表現であろうが、もの足りない規定だと思う。これでは『古今集』編者の迫力にかなわない。

人が一片の句、短い言葉の連なりの歌を書きとめるのは、人生と世界の真実を露わにする言葉を見出し、それを結晶させる言葉の構成を創り出そうとしているのだ、と言えないだろうか。拙い句や歌も、その理想を遠くにおいて、それが自己の励ましにつながり得るものであることを望みながらの、現実の有限の生の中の試みではないだろうか。それにしては、わたしがこの一年書きとめたものは痩せている。あまりに忙しく過ごしているのだ。

「実朝には三十一文字が必要であった。：刺客が近づいていることを感じながら書く時は自由詩ではない。それが形式と表現との関係」だと言う人がいる。これを拡大すれば、人は「死」という刺客がかならずわたしのものにやってくることを知っているわけだから、もっと切実な言葉に出会っているのではないのか。

ただそれをよく見極め表現する力がわたしに不足していることを憂いながら、九年の歳月が経った。

一月二日 不可思議の宇宙世界を解き示す映像を見て漂うわたし

一月三日 肉親の健忘怒りわたくしも忘却の日々また歩み出す

一月五日 正月の望月のぞみさし出す

一月八日 寒風狂行打茅屋 孤犬求朋吠黒闇

凍身空感胸中熱 明旦願在白雪庵

一月十一日 葦の間に冬の陽溜まり浮かぶ鴨

寒日和琵琶の語りを聞く鴟

(車のラジオが、明智左馬助秀満の「琵琶湖突っ切り」を語っていた)

一月十二日 冬の夜の銀河鉄道澄み渡る果てなき天に想念運ぶ

一月十四日 ワックスで磨きをかけよ冬の日々

一月十五日

冬の雨けむる夕暮れ家路指すカラスの群れが描く形象

「一つの言表は、いつでも、他の諸言表で充たされるさまざま余白を有している。」……フーコー。

一月二十三日

この歌はただ諸規則にしたがうとフーコーは言うなお詠ずべし

「積み重ねられた多くの語、多くの紙の上に排列され、無数の視線に供されている多くのしるし、それらを分節化する動作の彼方にそれらを維持しようとするきわめて大きな努力、それらを人間の記憶のうちに保存し、登録することに払われたきわめて深い敬虔な心——これらすべては、それらの語やしるしを描く貧弱な手、それらにおいて安らぎを得ようとする不安、以後生きのびるためにはそれらしかもっていない破産した生、などが少しも残らないようにするためであるか？」……フーコーは、自己の営みに根本的な疑問符をつけて、ものわかりに終わることを否定する。

一月二十四日

漆黒の虚空を舞つて桜散る有無の境のディスプレイ上

一月二十九日 黄砂来て句も出ぬ寒の日を籠める

つけ句 『明月記』 さえ歌の無い月

月見えず冬の夜空に耳澄ます

かすかに脳をめぐる血の音

NHKテレビが、若い女性の間で俳句の会が流行していると報じていた。どうやらここでも、漂泊のアマチュアリズムに徹するのがよさそうだ。

二月一日 「雪中七句」

綿雪を禿頭に置き野に出でよ

狛犬が口開け雪を食うお寺

しんしんと雪降る森の息吹聴く

一つかみ雪持ち宙に浮遊する

赤い傘道草をする雪の原

寒中に雪見の柿の熱い心むね

かいつぶり雪の川面に身じろがず

二月六日
わが犬は宵からいびき寒ゆるむ

二月七日
三時間貴重な時を不正なる会議が盗む天網疎なり

ひとつの生飯飯とあれ冬の天

二月十日
しがらみの世間に人をからめとるこの重力場突きぬけて出よ

雪避ける海辺の道に梅の花

二月十一日

ゆつくりとプロペラ回し発電する身を切るほどの早春の風

二月十二日

一目散きつねが目指す藪の春

二月十五日

春きざす雨は樹上の鳥のため

二月十七日

山塊をみぞれで染めて春陽射す

二月二十日

もちの実を滴る水の玉光る

二月二十一日

野良犬を冷たく打つな名残り雪

間合いとり連れ立つ猫や余寒あり

二月二十四日

菜の花を尋ねる今日のプロジェクト

成否の定かでない手間のかかる仕事に日々が過ぎる。人生は数多くの日々である。今日のプロジェクトを成功させること。

二月二十七日

颯々と黄砂が楠の木にそそぐ

二月二十八日

キジバトと花の蕾の下に在る

三月五日

啓蟄の寒さにすくむ青バツタ

三月十日

韓国の青年記者と東海を見つつ語らう波静かなれ

三月十五日

春の雷 新奇なること世にあらず

明日の新奇を待たないと覚悟を決めることが、今日を切り開く。

三月十六日

いかにおわす木蓮の花称えた師

三月十七日

地位誇る人の正体露呈して辞す人真に存在者たる

三月二十二日

飽食の男女学位を受ける春

三月二十四日

それが出て百年経とうとしている今ごろになって、『ユリシーズ』を読んでいる。今、オデュッセウスは新しい冒険譚をどのように詠えばよいか、東の辺境の島国で、：

白い蛾が

情念・理念

混沌を

遍歴し舞う

大世紀末

三月二十五日

春寒に能古志賀かすむ年重ね

「同僚が尊厳を傷つけられるほどの目に遭っている日に」

一九九六年三月二十五日

この星に一つの彗星がもつとも近づき
この四百年間でもつとも明るく輝いた、
世を革めよ

改元せよ 共和と

すでに地が震えたのは去年のことであつた
人間という者たち、なぜ恐れおののかないのか
この四百年間に畿内でもつとも大きかつた地震に、
並々ならぬ力量をもつてサトリというものを開いたソンシが
万の人命を屠つてジョウカしようとしたことは妄想であつたと
北辰に至ろうとする星が明示している

虚言・空信を去り

この天変地異が明らかに示す命を

人たる者よ、なぜ見ようとしなののか

文明はかくも進歩し

星宿の法をかくもつまびらかにしたというのに
なぜ天地の異変から教示を受けないのか

明なる諸君に見えるものはないとしても
事物に暗いわたしは見よう
わたしだけでも この天命を聴こう
天命は下ったのである

歴史が終わるほどに文明の進歩したこの星
強い者は柔和な笑みを浮かべるほど強く
弱い者は強く心臓を圧迫されるほど弱くある
この星の今を、わたしは肯定しない
わたしだけは天変地異に戦こう
百の武をふるいおこし師を發しよう
歴史をふたたび始めるために

三月二十六日

花東よ明らかな知で部屋満たせ

オロオロと歩き非力に春暮れる

三月三十日

病院で行き交う人をながめつつ人生というもの考える

三月三十一日

雲海に菩薩が浮かぶ春うらら

湯布の春天に遊んで俯瞰する

海辺から雪山を見る加賀の春

四月二日

梅林に雪の添い散る兼六園

甘酒をすする茶室に春の雪

四月三日

戻り雪白山に添え春光る

玲瓏と月は末世の花惜しむ

(月齢十五)

共に在る月花愛しむ五十坂

夜半に変な夢を見た。地下室かどこかからわき上がるように出てきた人物

を撃退しようとするが効き目がなくて、「おまえは悪魔か、おお、（やはり）悪魔だ」と言ったところで目が覚めた。家内が、なにかよく判らない言葉で寝言を言っていたと笑った。「悪魔」は、平凡な人間に見えた。

悪夢見てストレス悟る夜半の床清々とした精神願う

現し身は花の下行く錯乱者

四月六日

孝行の花見帰りに雪花菜買う

菜の花が咲く山の豆腐屋鬻売る

四月七日

たんぼぼを踏んで花見のうかれ足

「自分のやった行為も他人のやった行為も、その両方において、実行された行為は合理的なものではない」…ナーガールジュナ『中論』。

四月十一日

花冷えに花無き海を行く潮

ひとひらの花が波間を越える旅

玄界に日は落ち娑婆の春暮れる

四月十二日

わたつみの尽きせぬ語り聞く桜

四月十八日

海棠と目覚めずにいる昼下がり

山吹は散る忘却の底深く

四月二十三日

宴会は終わる人事の奇妙さよ行方を知らぬ春の夜の道

四月二十五日

塀の上で白犬眠る春の暮れ

藤棚の上で幟も垂れ下がる

四月二十七日

膚に入る青葉の慈悲や目に泪

泪を浮かべるのは魚だけではない。また、行く春を惜しむときばかりではなく、春のにぎわいに歓喜するときにも…。

四月三十日

蝶々と袖をすりあう四月尽

五月六日

大坊主伏して頭も春の山

五月七日

八重桜紅塵に散る時節あり

「生きている真実は、性と相を分けることのできない全体的事実である。」
岩波文庫『正法眼蔵』を読んでいる。

五月八日

開演の前にホルンの鳴る音がふと気づかせる初心というもの

五月九日

幾たびも人間の口ついて出た言葉を連ね歌のまねごと

五月十日

春熟れて門からアヒル出でる家

五月十五日

日陰なす青葉広げる日の力

五月十六日

一日が始まる音に聞き入ってわたしの世界再構築す

バラを見るこの五蘊の身頼めとよ

五月二十二日

夕陽に真紅のバラが対峙する

「夕陽妄語」で加藤周一氏が「断章取義」を書いている。「魂の感受性は中原以来変わらないが（「不易」）、対象の領域は新しい（「流行」）」。

「題材が変わっても、変わらなくても、詩的修辭法には古典へつながる一面がある。すべての詩は「本歌取り」へ向かうのかもしれない」。「昔も今も詩人たちは「時間」を意識し、したがって自らの死を見つめる」。

高林武彦という人の詩の一節が引用してある。「しかし過ぎ去ったのも何もなかったのも　ただ同じだろうか　……」。

五月二十五日

夜半過ぎ暴走の音聞く床で人間という条件思う

朝まだき惑ういかなる活動に死すべき者の生向かうべき

五月二十六日

現実の人生微妙絶望と希望のあわい進み行くもの

「尽十方界是箇真実人体なり、生死去来真実人体なり」。「那邊の事（自己の正体）を体取し、這裏（自己の具体的な生活）に却来して行履せよ」。

六月二日

六月の山まばゆくて人失せる

（血族の人）

山かげに空木花咲き踏み惑う

松島の磯の家路へ招く月

六月十三日

蝶々を撥ねたかと肝を冷やす朝

六月十九日
あじさいの渴き癒せば美の報謝

海と空と有情を巡る水の法

六月二十三日
六月の光は都市の川の上

実に久しぶりに町に出て、映画「イル・ポステイノ」を見る。微塵のよ
うに小さいながらも自己の正体のところにあつて…、願わくば、この臨時郵
便配達夫のように、望外にも一片の美しい句にめぐり会えますよう。

六月二十四日
九州を沈める雨に咲け空華
(九州とは世界)

六月三十日
あじさいをぼさりと落ちて去るトカゲ

緑風にたちまち雨や鳥渡る

七月一日
くたびれて徒労に消える土曜日に遠夏山の緑に見入る

七月七日

梅雨明けずコーヒーカップりんと鳴る

七月の有時、風鳴り鳩と鳴く

人動く波紋、霖雨を凌駕する

七月十三日

梅雨明けて全山竹の萌え黄色

青山は夏七月も水上行

七月十四日

入道が初めて空に出る時節

七月十六日

遅刻して田の水覗く児童あり

初蟬はいくたび巡る世を鳴くか

七月十七日

めくるめく現実波の上の地下

(映画「アンダーグラウンド」)

七月十八日

夢無きにしもあらず合歓の花淡く

茜雲夏台風の先備え

七月十九日

一界を空華で創る遠花火

七月二十一日

一人居の夏の夜犬のそばに座しスイカを分ち道元を読む

七月二十三日

就職がまだ決まらぬと娘から電話を受ける父また無力

七月二十四日

「龍也くん、もう月が出とる……」

虫網を持った幼児の語らいに禅師も学ぶ味わいのある

半月を汗ぬぐい見る虫追う子

七月二十九日

咲く藤で蝸今日を成就する

(まれに人間の身心を保任せり)

七月三十日

月下美人が一輪咲いた。太陰曆六月十五日。「花開世界起」。

手には取れ盛夏の月の清澄さ

八月一日
棟にあり孤高を守る夏の草

八月八日
肩を打つトンボの顔に憶えなし

大汗をかいて愧じいる痴愚の身を

八月九日
すいほうにきしてなつまたいかんとすいつときのせいなんとすべきか

八月十五日
浜風が盆会の笛の音を渡す

八月二十三日
オーバーヒート苦しい夏を抜け出せず

迷い来て一夜を宿る幼な鳥そのくちばしは自我を主張す

八月二十八日
月出でて踊る輪もなく虫の声
(太陰曆七月十五日)

やがて三世を巡る雨降る

八月三十日
放心し萩と揺られて午睡する

八月三十一日

秋風に吹かれ腰痛かかえ行く

鶏頭が列なして行く散髪屋

九月一日

秋雨を集めて谷に響く音目を閉じて聞き怒り静める

霧のぼる檜の森の深緑

風沁みる放下はるかに遠花火

九月二日

会議で虚しい言葉を聞きながら、

雲の影山の緑を誘いつつ西稜登り青空へ行く

コウモリは薄明に飛ぶ力あり

光とぼしいこの社会、この地を離れて飛ぶことはできない。ただ地上を行く神通をもつて進むほかはない。

九月五日
秋水を透かし魚影を写す川

九月八日
柚味噌で焼きなすを食う善男子

九月九日
ペガサスが空にあやうい秋曇り

たそがれの会議器でない人が主宰してなお無明広がる

九月十日
緑なる山のふところ秋茜

九月十一日
藁の香と泣きつつ帰る子の夕べ

九月十二日
猪^しおどす音した後の静寂に調声しました虫が鳴き出す

九月十四日
一日の命を終えて端正に花びら閉じるその名は無窮花
(花瓶で)

九月十七日
都市の田で初めて稲穂拾う子等

九月二十日

諸世界を雨滴に写す曼珠沙華

楽聖の願い広がる尽世界

船の艫揺れて波音彼岸入り

九月二十一日

秋風と空へキウイの蔓の先

根つめてやつと一つだけバグ見つけ床に就き聞く集く虫の声

九月二十二日

すすき穂の向こうに菩薩横たわる

九月二十三日

曼珠沙華手に優婆夷行くこの世界

九月二十六日

夕焼けて待宵月の赤い頬

十月四日

緑なす丘の頂沈む日に草食む馬やイギリスの秋

落ち葉踏む異国の町を過ぎた時

(なつかしいオックスフォード)

十月八日

ブダペストに来た。

落葉のごとくつがいの鳥落ちて異国の丘に秋は深まる

十月九日

恋人が釣りして暮れるくさり橋

マジヤールの踊るブーツを見る夕べ

十月十日

田舎屋に機織りのある花野行く

黄葉のドナウに魚はねる暮れ

ひとときをドナウベンドの石畳踏んで刺繍の並ぶ店見る

十月二十一日

朝寒に首搔き鈴を鳴らす猫

新藁で目を閉じ猫の日向ぼこ

十月二十八日

朝日射す刈り田で読書する男

(わたしではない)

十月二十九日

独裁者赤肉大団受位の人願うは君の無為であること

(狂歌)

秋水を歩む皮袋の一路あり

十一月五日

身心をしぐれの野辺に解き放て

十一月十二日

風車回しコスモスめぐる風

十一月十三日

月細く研ぐ寒さ来て雪便り

十一月十五日

柿の葉の赤つややかに冬支度

小春日に松毬まるく暖まる

十一月十七日

瀧音と紅葉散り入る籠もり堂

落ち葉焚く鬚まだ結えぬ相撲取り

十一月十八日 猟官の次は猟金この国に追求すべき価値失われ

十一月二十日

テレビのニュースの一こまに、山形県でクモが上昇気流に乗って遠くまで、ある場合には山一つ越えて飛ぶというのを映していた。野にクモの糸が数多くたなびいている。この投企は、何度もの失敗の後に成功するのだろう。成功した後にもまた試みて失敗することもあるだろう。

糸放ち空飛ぶ蜘蛛の自由なる

十一月二十三日 創造を果たし桜の紅葉散る

十一月二十四日 会話無く老母と二人外国の野末を映すテレビに見入る

十一月三十日 遠山にうすく雪置きしぐれ降る気高いものの存在を知る

時雨降る運動場に時掴み鳥が一羽飛ぶ時を待つ

十二月五日 限りある時をいかなる価値めざし行為すべきか木枯らしに聴く

十二月六日

「哲学者のだれかによって言われなかったようなことは一つもない」とルネ・デカルトは言う。それでも「生」は一つの句を発する。

陽の中を雪降る朝に鳥渡る

十二月七日

出で立つてみぞれの空を見上げればわが山は雪息のんで佇つ

十二月八日

肥満した犬ぎこちなく歩み行く歴史の終わる日本中世

十二月十四日

軽やかに独りうつつの冬の蝶

ピカピカのバイク、夢見る伊達男

十二月十五日

久しぶりに短い散歩に出た。夏みかんの木があるところを老農婦が道に沿って金網を張っている。「イノシシが出ますか」と聞いたら、「反対側の方に出ますが、こちら側は人が盗らないようにしています」ということだった。子供の頃、よそのすっぱい夏みかんを「しっけい」したこともありました。今年柿がよくないという話。

夏柑を囲う農婦の冬一日

ふゆののをとりたつおとのみたしけり

父の祥月命日で、母が正信偈をあげるのにつきあっていたら、台所の方で伊勢エビが二匹最後のものがきの音をたてた。

「筋肉の収縮だけがただ一つ意志の表現」伊勢海老跳ねる

伊勢海老の脳みそ食べて知恵もらう

十二月二十日
ただ人として立つ意気の無い人に理と情を説き手応えはなし

十二月二十四日
月皎々わが影と行く冬の路地

この現世あまねく照らす冬の月

オリオンの棍棒まさに月を打つ

十二月二十五日 木魚鳴りとまどい走る冬の蠅

吊いの行列の上鳶の声

念仏のコーラス低く湧く葬儀

(キリスト教徒のクリスマスの日)

十二月二十六日 たぐり寄す記憶にわかには整序なく途方に暮れる悲痛なる母

十二月二十七日 冬風の湾奥大船すべり入る

冬風に鴨が首振り水輪立つ

十二月三十日 老松で年越す鳶のいかり肩

一九九七年 正月
徐山亭 謹製

「有時」

歸省禪師

有時意到句不到

有時句到意不到

有時意句兩俱到

有時意句俱不到

道元

意句半到也有時

意句半不到也有時

有時高々峰頂立

有時深深海底行

有時三頭八臂

有時丈六八尺

有時拄杖拈子

有時露柱燈籠

有時張三李四

有時大地虛空